

## 谷崎潤一郎「人間が猿になった話」と「白猿伝」の関連性についての一考察

李 春 草

はじめに

谷崎潤一郎「人間が猿になった話」は、一九一八年七月、雑誌「雄辯」に発表された短編小説であり、猿に見込まれた芸者・お染が、猿の崇りと深い執念から逃れられず、ついに猿と共に野州塩原の山奥に姿を隠したといった内容のものである。円地文子は、この作品が「怪異談の傾向の強いもの」であり、谷崎が生涯持ち続けた「少年の情感とでも名づけたいものが、母体になって発展した作品の一つ」、「女性の肉体賛美の一変型」であると指摘した。千葉俊二は、「谷崎文学には珍しいテーマで、その手法、内容はむしろ鏡花のものだと思わせられるが、谷崎はどんな興味をもってこうした作品を書いたのだろうか。」と論じた。

また、ウオララック・クラウプトック「人間が猿になった話」

試論<sup>③</sup>では、民俗学の視点から、物語内容と日本の猿回し、猿聲入民話、谷崎の〈お染久松物〉の観劇との関連が論じられている。しかし、直接的な素材と創作契機に関しては言及されていない。この時期、ポーとその他「西洋」の撰取と感化から「途上」「改造」一九二〇・二）のような推理小説、映画への関心から「人面疽」（新小説）一九一八・三）のような映画志向の小説を書いていた<sup>④</sup>。だが、同じ年に書かれた「人間が猿になった話」はそれらの類に属さない異様な作品である。

一九一八年一〇月、谷崎は中国大陸へ旅立った。「人間が猿になった話」は、中国旅行準備中に著した作品である。創作と谷崎の中国旅行とは何か関連しているのではないか。本稿は、当時の谷崎の読書活動を調べ、この作品と『唐代叢書』『白猿伝』との関連に焦点を絞って論じるものである。

一  
摘されている。<sup>⑥</sup>

『剪燈新話』（蘇州紀行）「中央公論」一九一九・二一三

『水滸伝』（西湖の月）「改造」一九一九・六、「鮫人」中央公

論」一九二〇・一、三〇五、八〇一〇

『西湖佳話』（西湖の月）

『唐才子伝』（鮫人）

李笠翁の十種曲の「辰中樓伝奇」「比目魚伝奇」（西湖の月）

『全唐詩』（鮫人）

楊鉄崖、高青丘、王漁洋の詩（西湖の月）

倪雲林、王摩詰の詩（鮫人）など。

ところが、「人間が猿になつた話」と中国古典との関連はこれま  
であまり注目されてこなかった。実は、「人間が猿になつた話」の  
〈美女が猿に見込まれて山奥に連れ去られた〉という主要な筋に似  
た話が、中国古典に散見している。中野美代子『孫悟空の誕生――  
サルのみ話学と『西遊記』』<sup>⑦</sup>によれば、「美人を拐かすサル」の話は  
「数え切れぬほどある」。最も古い例は漢代の焦延寿の著といわれる

『易林』巻一で、ほかに、晋の干宝の著『搜神記』巻十二、晋の張

華の著とされる『博物志』巻九、唐初の「補江総白猿伝」、唐の段

成式の『西陽雜俎』巻十六、明代の洪梗が編んだ『清平山堂話本』

の「陳巡檢梅嶺失妻記」、「剪燈新話」巻三の「申陽洞記」など、枚

場する中国古典について、次のような諸作品があることがすでに指

後に書かれる紀行文や小説、戯曲を読めば、この時期に谷崎が中  
国の古典を読み漁ったことがわかる。西原によれば、谷崎が『支  
那趣味』の文学を集中的に生産したのはもっぱら一九一七年から一  
九二一年にかけての時期である」という。この時期の谷崎作品に登

場する中国古典について、次のような諸作品があることがすでに指

谷崎潤一郎「人間が猿になつた話」と「白猿伝」の関連性についての一考察

拳に暇がない。

そのうち、最も影響力を持ったのは唐初の「補江総白猿伝」であり、後の「陳巡檢梅嶺失妻記」「申陽洞記」も「補江総白猿伝」から発展した話であると中野は位置づけた。「補江総白猿伝」は略して「白猿伝」ともいう、中国唐代志怪小説の一つである。作者と成立時期は不詳。『新唐書』、芸文志、子類、小説類における「補江総白猿伝一卷」との記述が最古の記録だが、具体的な作品内容はわからない。⑧。現在、「白猿伝」のテキストとして、『太平広記』巻四四四「歐陽紇」の條、明・顧元慶『顧氏文房小説』、明・陶宗儀『說郛』「白猿伝」などが流通しているほか、清代に陳世熙が編集した『唐代叢書』にも「白猿伝」が見出せる。日本では、江戸時代に林羅山によって和訳され、「歐陽紇」と題して『怪談全書』（福森兵左衛門一六九八）巻一に収録された。また、大正九年二月に出版された『国訳漢文大成』文学部第十二巻や、岡本綺堂訳『支那怪奇小説集』（サイレン社 一九三五・一一）にも収録されている。「白猿伝」に関するこれらの記載は字句に若干異同が見られるが、主な話は共通している。⑨。

「人間が猿になった話」では、作中人物と舞台設定のいずれもが日本化されたが、〈美女が猿に拐かされた〉点については、右に挙げた話と共通しており、さらに、その細部の描写から見ても、「白

猿伝」との類似点が多く見出せる。

二

「白猿伝」の梗概を、左に掲げる。

——梁の武帝の大同年間（五三五～五四五）末頃、將軍歐陽紇は桂林まで攻め入り、現地の部族をことごとく平定して、さらに陰阻の地へ分け入った。將軍は美しい妻を伴っていたが、土地の人から美人を攫う魔物がいるので気をつけるようにと忠告される。將軍は兵士に陣營を見張らせ、妻を密室に入れて下女たちに守らせたが、その甲斐もなく妻は何者かに攫われてしまう。將軍は軍隊を留め、妻を搜索した。

一ヶ月を過ぎた頃、竹林の中で妻の履の片方が見つかった。さらに十日余り、陣營から二百里ほど離れた、南に青山を望む谷川に着いた。絶壁の上の竹林に紅い綾絹が見え隠れし、女たちの笑い声が聞こえる。蔓につかまって登ると、異世界のような美しいところに出た。

將軍が来意を告げ、女たちに尋ねたところ、皆、白猿の精に攫われてきた者で、將軍の妻もここに居ることが分かった。將軍は女たちの助力を得て白猿を退治し、妻を救助したが、白猿は、將軍の妻がすでに自分の子を身籠もっており、その子は必ず立派な人物とな

るといふ遺言を残した。一年後、歐陽紇の妻は白猿によく似た男の子を生んだ。その後、將軍は陳の武帝に殺されたが、その子は將軍と親交のあつた江総に養われ、成長して文学と書に長けた、名の知れた人物となつた。――

「人間が猿になつた話」と「白猿伝」とは、美女が魔力を持つ猿に攫われるというあらすじが共通している。のみならず、女性の美しさの描写、猿の魔力、女性を探す過程に関する発想なども似ている。

まず、猿に攫われた女性の外見について、兩作品はいずれも女性の白皙と美しさを強調している。「人間が猿になつた話」のお染は、「体つきは少し小柄の方で、何となくおつとりとした、色の抜け上るやうに白い」子で、「浅草の十二階で百美人の肖像を陳列した事があつたが」、その中に入っていたほどの美人とされている。同じく「白猿伝」の將軍の妻は、「紇妻織白、甚美。」（色白クシテカホヨシ）と表現されている。

また、猿が持つ魔力について、「人間が猿になつた話」では次のように描かれている。

一 体何処から、いつあんな者が船の中へ紛れ込んだのだらう、船頭を始め皆が其れを不思議があつたが誰も謎を解く事は出来なかつた。船頭の家は江戸川の近辺にあつて、其処から今朝早く

船を漕ぎ出して来たのだが、無論猿なんぞが忍び込んで居た筈はなし、万一忍び込んで居たにしても、それが今迄見付からず居よう道理がない。

狭く限られた空間へ、人間に気づかれず潜入できる魔力を持つ猿と設定されている。「白猿伝」においてもこれと類似する魔力が記されている。

紇甚疑懼、夜勒兵環其廬、匿婦密室中、謹閉甚固、而以女奴十餘同守之。爾夕、陰風暗黒、至五更、寂然無聞。守者怠而仮寐、忽若有物驚悟者、即已失妻矣。関扇如故、莫知所出。（紇キヒテ疑シキナガレモ夜ニ入テ兵ヲヨビテ家ヲトリマワシ。其女ヲ奥深クカクシテ下女十餘人ヲナラベ番トス。其夜事ナシ。明夜ニ及テ風吹テ天クラク夜半スギテシヅマル。守者クダビレテ仮寐ス。忽物ニオソワルル如クニシテ。目サメレバ女既ニ見ヘス。門戸ノ扇ハモトノ如クニシテ出ル所ヲ知ルコトナシ。）

さらに、猿に攫われた女性を探す過程においても類似性が見られる。「人間が猿になつた話」には、次の一節がある。

内藤さんはわざ／＼下野へ出かけて行つて、草鞋穿きで日光から足尾、高原峠から塩原の方を十日ばかり尋ね回つたが、途中で何匹も猿に出遇つたにも拘らず、お染の姿は遂に見つからなかつたさうだ。尤も、鬼怒川の川上の山路で溪川の瀬に突き

出て居る巖の上に、お染の持つて居たらしい珊瑚の簪と鼈甲の櫛とが落ちて居たと云ふし、内藤さんは其れを東京へ持つて帰つて私に見せたくらゐだから、たしかにあの邊へ逃げ込んだのには違ひなからう。

お染を探し奔走した内藤さんが、結局、見つけることはできなかった。しかし、お染の髪飾りと思われる「珊瑚の簪」と「鼈甲の櫛」を発見できた。「白猿伝」にも類似した展開が見られる。

因辞疾、駐其軍、日往四週、即深溪險以索之。既逾月、忽於百里之外叢篠上、得其妻繡履一隻。雖侵雨濡、猶可弁識。(病アリト云テ軍兵ヲトドメ毎日四方ヲ尋嶺ヲ越溪ヲ伝險ヲ凌テ是ヲモトム。月ヲ経テ百里ハカリノ外ニテ叢ノ上ニテ彼女ノ履一ツヲ得タリ。雨露ニヌレタリトイヘバ、履ノ形疑ナシ。)

女の遺留品を手掛かりとする発想において、ふたつの作品は共通する。しかし、「人間が猿になつた話」では髪飾り、「白猿伝」では片方の履と、違いがある。「人間が猿になつた話」のお染が葭町の芸者と設定されていることからみれば、「履」よりも「珊瑚の簪」「鼈甲の櫛」がよりふさわしい。

そのほか、女が連れ去られた場所について、「人間が猿になつた話」では、

野田さんが塩原の温泉へ行つて、塩の湯の奥の方にある瀧を

見物に行つた時に、向うの山の上で、猿と一緒に遊んで居る人間らしい影を見たことがあつたさうだ。(略)あれがきつとお染だつたかも知れないと、内藤さんはよく私に話したものだ。と、「塩の湯の奥の方にある瀧」の「向うの山の上」とされている。千葉俊二が指摘したように<sup>10)</sup>、人間社会から遠く離れた「人外境」ともいえる。「白猿伝」でも同様に、將軍の妻が攫われた場所が次のように描かれている。

又旬餘、遠所舍約二百里、南望一山、蔥秀迴出。至其下、有深溪環之、乃編木以度。絶岩翠竹之間、時見紅彩、聞笑語音。(深山ニワケ入ル十日餘テ。我家ノ外ニ百里計ト。オボシキ所ニテ。南ニ當テ一ノ山アリ高クシゲレリ其下ニ溪水アリテ流廻ル木ヲ編連テ巖竹ノ間ヲ渡ル時ニ女ノ笑ヒモノ云聲ハルカニ聞ユ。)

「人間が猿になつた話」と「白猿伝」とは、好色で魔力を持つ猿が美女に取り憑いたというあらすじにおいても、女性の容貌、猿の魔力、女性を探す過程、連れ去られた場所などの設定においても、共通していることがわかつた。

### 三

それでは、谷崎ほどの本文で「白猿伝」を読んだのか。「白猿伝」

が収められた書物には、『太平広記』『顧氏文房小説』『説郛』『唐代叢書』など、あるいは『怪談全書』が挙げられる。谷崎の中国旅行直前という時期、書物を手入する際の難易度、書物を携帯する際の便宜性などの面を考慮し、各種刊本を年代順に検討していく。

『太平広記』は宋代に成立した説話集。漢から宋初までの説話・伝奇などを収録した、全五百巻から成る膨大な叢書である。『顧氏文房小説』は、明代の顧元慶によって編纂された全五十八巻の叢書。『説郛』は、同じ明代に陶宗儀によって編纂された全百二十巻の叢書であり、その内容には、諸子百家の説、筆記、詩話、伝記、考古博物、地理風土などが含まれている。『唐代叢書』は『唐人説書』ともいい、唐代及びその後の五代や宋代の文学作品全百六十四篇を収録したもので、一七九二年に清の陳世熙によって編纂された。その内容は、志怪や伝奇小説のみならず、稗史、園芸、地理、風土、宗教、詩歌、散文などが含まれている。谷崎が好んだ中国南方の水郷・蘇州の地理、歴史伝説を記載する『呉州記』や、後に谷崎が紀行文『蘇州紀行』（原題「画舫記」「中央公論」一九一九・二―三）、小説『西湖の月』（原題「青磁色の女」「改造」一九一九・六）で著すことになる、「真嬢」「柳土肩」に関する詩や伝説も収められている<sup>⑪</sup>。また、『怪談全書』は林羅山が『史書』ほか中国の書物から怪異譚を集めて和訳した怪談集で、全五巻から成る。日本語で記され

ているため読みやすく、谷崎がこれを読んだ可能性が高い。しかし、中国旅行直前という事情を考慮すれば、『怪談全書』よりも、中国を知るための百科全書のような趣を持つ『唐代叢書』に拠ったと考える方が適切ではなからうか。谷崎が旅行後に著した小説「鶴唳」〔中央公論〕一九二一・七）と戯曲「蘇東坡」〔改造〕一九二〇・八）が、和訳『西湖佳話』ではなく、直接原典『西湖佳話』に題材を取ったという事実から、原典を読むことは谷崎にとって珍しいことではなかった。

それに、『唐代叢書』は刊行年代がもっとも近いうえに、清代から民国時代にかけて再版が繰り返され、広く普及していた。この間の事情について、魯迅はエッセイ「破『唐人説書』」で、次のように述べている。

『唐人説書』は『唐代叢書』ともいう、早くから小木版のものがあったが、今は石印本もある。そのため、脱字、誤字、文の区切りが増加した。(略) 小説であるため、以前の儒者の論争に値しないのであって、畢竟、非難する人がいない。今に至って相変らず印刷を繰り返し、楽しまれるほど流行っている。(筆者訳。原文：『唐人説書』也稱『唐代叢書』、早有小木板、現在却有了石印本了、然而反加添了許多脫落、誤字、破句。(略) 只是因為是小説、從前的儒者是不屑辯的、所以竟沒有人

來抨撃、到現在還是印了又印、流行到「不亦樂乎」。

具体的には、一七九二年の挹秀軒刊本、一八〇六年の序刊本、一八四三年の序刊本、一八六九年の右文堂刻本、光緒年間（一八七五～一九〇八）刻本、一九一一年の上海掃葉山房石印本、一九一一年の上海天寶書局石印本、一九二二年の上海掃葉山房石印本などが刊行されている。

大庭修『江戸時代における唐船持渡書の研究』によれば、『唐代叢書』の日本渡来は、天保十二年（二回、一部六套、一部二包）、嘉永三年戊五月（一部四本）、四年五月（二部各六套）・玄五月（一部六包）、安政二年十一月（一部）であるという。日本で早くから受容された。現在、日本では、一七九二年の挹秀軒刊本をはじめ、その後の刊本が流通している。一八〇六年の刻本（三十六冊）と一九一一年、一九一三年の上海掃葉山房石印本（十六冊）が最も多い。芥川龍之介の蔵書中にも『唐代叢書』（三十六冊）<sup>15</sup>が見出せる。海老井英次や村松定孝らによれば、「黄梁夢」（一九一七・一〇）や「杜子春」（一九二〇・七）の典拠を『唐代叢書』に求められるという。<sup>16</sup>

日本での所蔵が多い『唐代叢書』は、谷崎にとつても決して入手しにくい書物ではなかった。また、友人芥川龍之介と（支那趣味）を同じくしていたことから推して、「人間が猿になった話」を著す

際に谷崎が参考にした文献として、一八〇六年の刻本『唐代叢書』

三六冊を挙げても良いと考えられる。

谷崎が少々異様なテーマの作品「人間が猿になった話」を著した動機のひとつとして、この時期における芥川との頻繁な交流を想定できる。小谷野敦編『谷崎潤一郎詳細年譜』（小谷野敦公式ウェブサイト <http://homepage2.nifty.com/akoyano/tanizaki.html>）から抜粋する。

一九一七年

「1月、（略）芥川来訪。両者菩提寺を同じくする。」「4月（略）5日、手紙で芥川を慰める。」「5月（略）28、29日頃から6月上旬、（略）佐藤春夫、江口渙（略）、赤木、久米、芥川が谷崎を訪れる。」「6月（略）27日、日本橋のレストラン「鴻の巣」で、谷崎が発起人の一人となって、芥川『羅生門』出版記念会。」「28日、芥川を訪問、遊んで帰る。」「7月（略）上旬、佐藤、芥川、江口、赤木ら訪れる。」「10月「口の辺の子供らしさ」を『新潮』（芥川龍之介氏の印象）に掲載。」「30日、芥川を訪れて遊ぶ」。

一九一八年

「1月、芥川「良苦心・谷崎潤一郎氏の文章」を『文章倶楽部』に掲載。」「25日、芥川、鶴沼（引用者注…当時谷崎が泊



まっている場所)へ一泊で遊びにゆく」

さらに、一九一八年にふたりが発表した小説には共通性がある。

一九一八年七月に谷崎が「人間が猿になった話」を発表する半年前、一月に芥川は『聊齋志異』に取材した「首が落ちた話」を「新潮」に発表、五月には「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」(一、二十二日)に「地獄変」を連載していた。題名の末尾に「話」を付けるなど、「首が落ちた話」と「人間が猿になった話」とは、同じスタイルを採っている。また、〈女性と猿〉の話に関しても、「地獄変」における〈良秀の娘と小猿〉の話と、「人間が猿になった話」における〈美女が猿に連れ去られた話〉とは、その取り合わせが一致している。谷崎が芥川を意識していた可能性があるろう。

#### 四

中国古典「白猿伝」を素材としながらも、谷崎は、「人間が猿になった話」の人物名、時空間の設定、語り方などについては自身の創作意図に沿って改変した。とりわけ、物語の特別な時空間の設定によって、谷崎が「生涯持ち続けていられた少年の情感」<sup>18</sup>をもう一度蘇らせたのである。作品の冒頭で、物語の時間について以下のよう述べている。

その時分はまだわしも三十代の男ざかりだった。さうして内

谷崎潤一郎「人間が猿になった話」と「白猿伝」の関連性についての一考察

のお鶴と一緒に、葭町へ芸者屋を出してからまだ間もない時分、さうよなあ、事に依るとまだあの人形町通りが今のやうに広くなくつて、電車なんぞはもちろん通つて居なかつた頃だった。考へて見るとあの近辺も変つたものさ。今ぢやあ水天宮の向うが土州橋まで突き抜けて居るが、あの辺は随分ごみ／＼した狭つ苦しいところだったよ。(略)——さう、さう、それから今の長谷川町近辺に、ちやうど尾張町の服部のやうな大時計があつたつが、あれはつい此の頃まで残つて居たやうぢやないか。親爺橋の通りで古いのは千束屋に蓬萊屋、牛屋の今清なんぞも新しい方ぢやあるまいな。芝居でも明治座なんて物はなくつて、彼処にはもと久松座と云ふものがあつて、その小屋が焼けてから今の明治座が出来たんだと覚えて居る。

右の引用から分かるように、物語が発生した時間は「今」より三十年前の過去であり、舞台は当時の葭町である。さらに「明治座」「久松座」といった実在の劇場名が記されていることから、およそ一八七九年から一八九三年までの時期と推測される<sup>19</sup>。この時期は、明治維新の近代初期に当たり、都市の近代化を象徴する「電車」や「電燈」が登場してくる前後の、新旧時代の過渡期でもあり、まだ徳川という前時代の風景が窺える。とりわけ、葭町は江戸時代から引き続き遊興の地であり、都市の近代化の過程で取り残された町の



たはずまいや人々のなりわいに、なお江戸の名残が色濃く残っていた。馬場孤蝶は『明治の東京』<sup>20</sup>で、明治二〇年代末期の吉原には、昔ながらに鼈甲の簪を挿した娼妓を擁する店が幾軒もあった。また、明治二五年頃、銀座などの繁華街には既に電灯や軒灯が設置されていたにもかかわらず、「芸者屋」では格子戸の内に大きな提灯が下がっており、室内では行燈が用いられるという状態がづづいてたと記している。

この花街の特別な空間について、吉見俊哉は次のように述べている。

吉原や新猿楽町のような、日常の身分制的規範とは異なる「遊び」や「芸能」が展開される空間は、塀と木戸によって他の領域より一層慎重に囲い込まれていたものである。徳川期の都市における廓や芝居町などもつエネルギーは、それらの地域がこのような「統制された都市」の内部における制度的に開放された空間として存在したという、都市空間全体のなかでのこれらの地区の位置によって理解されなくてはならない。<sup>21</sup>

明治維新以後、都市区分の変革や道路の改正などは、東京に大きな変化をもたらしたが、遊びの場としての「芸者屋」は一つの非日常的な空間とされ、そこにまだ幾分前時代の面影が窺える。明治一九年、日本橋区蠣殻町で生まれた谷崎は、幼少時代に見た東京の町

風景と再会するためには、遠い昔に記憶を遡らせるか、あるいは、文明開化から取り残された下町の花柳界、遊興地といった特殊な空間に探し求めるしかない。「人間が猿になった話」において、谷崎は留吉爺さんの回想を借りて、記憶の中にある昔の東京との再会を図った。

おわりに

本稿では、谷崎が中国旅行を前にして著した小説「人間が猿になった話」と、中国志怪小説「白猿伝」との類似性を論じた。谷崎が一八〇六年の刻本『唐代叢書』に収められた「白猿伝」を読んだ「人間が猿になった話」を創作した可能性は極めて高い。また同じ一九一八年に、友人芥川龍之介が志怪小説『聊齋志異』に取材して題名に共通性がある「首が落ちた話」を発表したことや、〈女性と猿〉の話を含む「地獄変」が発表されたことから、刺激を受けた可能性もある。

結末について、「白猿伝」では、救われた将軍の妻が猿の子を産み、しかもその子が後世に名が知られる人物となったというハッピーエンドで結ばれているのに対し、「人間が猿になった話」では、お染が猿の執念と崇りから逃れられず、ついには猿が住む山奥に入ってしまった、救い出されることはなかった。本稿では未だ両作品の

関連を明確に裏付けることはできなかったが、「人間が猿になった話」の周辺を調査することによって、典拠探索の手掛かりを提出したつもりである。今後の研究において、さらなる充実を図りたい。

注

- ① 円地文子「若き日に愛読した作品」〔谷崎潤一郎全集 月報〕5 中央公論社 一九六七・三
- ② 千葉俊二「感覚の錯乱」『潤一郎ラビリンスⅦ怪奇幻想倶楽部』「解説」〔中央公論社 一九九八・一一〕
- ③ ウオラック・クラウプロトック「『人間が猿になった話』試論」〔続・谷崎潤一郎作品の諸相』専修大学文学研究科畑研究室 二〇〇三・一一〕
- ④ 秦恒平「谷崎潤一郎の大正時代」〔国文学 解釈と教材の研究』第三十卷第九号 一九八五・八〕による。
- ⑤ 西原大輔「谷崎潤一郎とオリエンタリズム」〔中央公論新社 二〇〇三・七〕
- ⑥ 原田親貞「谷崎潤一郎と中国文学（一）」〔学苑』第三四八号 一九六八・一二〕を部分参照。
- ⑦ 中野美代子「孫悟空の誕生——サルのみ話と『西遊記』」〔玉川大学出版部 一九八〇・一二〕
- ⑧ 西川幸宏「サルの異類婚姻譚と『白猿伝』」〔追手門大学・アジア科学年報』第一号 二〇〇七・一二〕による。
- ⑨ 「頼氏文房小説」「白猿伝」の冒頭に、「歐陽詢面似猿長孫無忌嘲之曰誰於麟閣上畫此一獼猴同時因戲作此伝託江總之名非実録成」との一文があり、此の話の由来を示す場合がある。

谷崎潤一郎「人間が猿になった話」と「白猿伝」の関連性についての一考察

⑩ 注②に同じ。

⑪ 「呉州記」、真娘、柳士肩に関する記述はそれぞれ『唐代叢書』の第五、六、八集に見られる。

⑫ 拙論「谷崎潤一郎『鶴唳』における漢籍要素」〔同志社国文学』第七十九号 二〇一三・一二〕による。

⑬ 一般に辛亥革命により清朝が打ち倒された一九二二年中華民国政府成立から一九四九年中華人民共和国成立までの時期と指す。

⑭ 初出『辰報副刊』(一九二二・一〇・三)。引用は『集外集拾遺補編』(人民文学出版社 一九七三)による。

⑮ 張蕾「芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡」〔国書刊行会 二〇〇七・四〕による。

⑯ 海老井英次は、「芥川龍之介文学典拠一覽」〔国文学 解釈と教材の研究』第三十七卷第二号 一九九二・二)では、芥川龍之介の小説「黄梁夢」が「枕中記」から、「杜子春」が「杜子春伝」からその材を取ったと考察した。また、「杜子春」の典拠について、村松定孝は、「唐代小説『杜子春伝』と芥川の童話『杜子春』の発想の相違点」〔比較文学』第八卷 一九六五・一二)において、「原典は『唐代叢書』、類似の話は『大唐西域記』『西陽雜俎』に見え、これらの書籍は、既に江戸期に木版本が複製されているから、そういうものを桂湖邨の『漢籍解題』」(明三八)を参照しつつ漢文に堪能な彼が読む機会を持ち得たであろうことは容易に想像される。」と指摘した。張蕾も、その著書「芥川龍之介と中国——受容と変容の軌跡」(国書刊行会 二〇〇七・四)では、芥川龍之介が一九二〇年に書いた小説「杜子春」が彼所蔵の漢籍『唐代叢書』及び『太平広記』から材を取って創作したと推測した。

⑰ 芥川龍之介「文芸雑誌 饒舌」〔新小説』第二十三号第五号 一九一八・五)による。

⑱ 注①に同じ。

⑲ 『東京都の地名 日本歴史地名大系 十三』(平凡社 二〇〇二・七)によれば、明治座の前身である芝居小屋は、明治初期に富田三兄弟により開かれた。その後、一八七三年に久松町に移転、喜昇座として改めて開場した。一八七九年に久松座と改称され、さらに一八八五年に千歳座に、一八九三年に左団次により明治座と命名された。

⑳ 『馬場孤蝶『明治の東京』(中央公論社 一九四二・五)

㉑ 吉見俊哉『都市の空間・都市の身体』(勁草書房 一九九六・五)

〔付記〕 本稿で引用した谷崎潤一郎の文章は、『谷崎潤一郎全集』全三十

巻(一九八一・五)―一九八三・一一 中央公論社)を底本とする。

引用に際し、ルビを簡略化し、原則として旧漢字は新漢字に改め

た。また、「白猿伝」の引用は一八〇六年の刻本『唐代叢書』に拠

る。その訳文は林羅山『怪談全書』巻一「欧陽紇」(福森兵左衛門

一六九八)に拠った。傍線は筆者によるものである。